

【資 料】

実習前OSCEを通して看護学生が実感した学習成果

笹 本 美 佐*, 小 園 由味恵*, 奥 村 ゆかり*, 山 村 美 枝*
川 西 美 佐*, 中 信 利恵子*, 眞 崎 直 子*, 村 田 由 香*

【要 旨】

本研究は、看護領域別実習前OSCEにより看護学生が実感した学習成果の内容を明らかにすることを目的に、本学の3年生を対象にアンケート調査を実施し、内容分析を行った。その結果、学生が実感している学習成果の内容は、【看護技術の修練への見通し】【臨場感のある看護実践への手ごたえ】【看護師としての自己理解の深まり】【看護実践への自己肯定感の向上】の4つのカテゴリーに分類され、11のサブカテゴリーが含まれた。これらより、学生は①看護師としての自己形成の助長、②自律的動機づけ、③自己の内面の成熟に向けた変化に学習成果を実感していることが示唆された。

今後、実習前OSCEの向上を図るために、実習前OSCEを受けるまでのプロセスを含めた看護師としての自己形成の助長、および自律的動機づけや学生の内面の成熟に向けた変化の助長を包含した視点からも実習前OSCEの評価および検討を行い内容に反映させていく必要がある。

【キーワード】 実習前OSCE, 学習成果, 内容分析

I はじめに

日本赤十字広島看護大学（以下、本学）では、平成21年度から大学教育学生支援推進事業として「看護学生のための早期離職予防シミュレーションナビゲーター」をテーマに取り組んできた。

このプロジェクトは、新卒看護師の早期離職を防止するために、看護実践能力の育成を図ることを目指し、4つの柱で構成されている。1つは、学生が看護技術と看護判断力の習得のためにシミュレーターを活用しての自己学習が行えるためのシミュレーションセンターの開設。2つには、ICT (Information and Communication Technology) の導入により、本学の教員が作成した看護技術教育用動画を学内や自宅から視聴でき、反復学習が行えるための環境整備。3つめは、各看護専門領域別（以下、領域別）の実習前および卒業前のObjective Structured Clinical Examination（以下、OSCE）の導入による、看護実践能力における学生の自己課題の明確化および獲得に向けた学習の動機づけ。そして、4つめはOSCEで活用する模擬患者 (Simulated Patient/Standardized Patient: 以下 S

P) の養成である。

つまり、本プロジェクトでは、シミュレーションセンターの開設やICTの活用など、学生が学ぶための環境を整えるだけではなく、OSCEを受けることで学生個々の課題が明確化され、そのことが学習への動機付けになり、学生が主体的に学ぶことで看護実践能力の向上が図れるような取り組みを行っている。

これら4つの取り組みの中で、本研究ではOSCEの導入における実習前OSCEに焦点をあてて述べる。

OSCEは、日本において2005年に医学部および歯学部において正式に実施されて以降、注目されるようになってきた。最近では、本学のように臨床での実践能力の育成のためにOSCEを導入する動きが看護系の教育機関に波及してきている。

そこで、医中誌Web検索により、OSCEを導入している他大学を概観してみると卒業前のOSCEが中心となっており、実習前のOSCEについては、13校から報告がされているだけである。これらの報告では、OSCE課題や評価についての検討、また実習前

*日本赤十字広島看護大学

OSCEの教育効果として、自己の課題が明確化することによる臨地実習に向けての学習の動機づけ（浅川，市村，小室，2005；浅川，市村，小室，2006；大場，鈴木，2008）が行われていることを明らかにしている。

このように実習前OSCEを教育者の立場から検討されているが、学生自身がどのような学習成果として感じているのかについては明らかになっていないため研究的に取り組むこととした。

なお、本研究におけるアンケート調査は、実習前OSCEにおける①今後の課題の検討、②教育的フィードバックに関する検討、③学生が実感する学習成果について質問項目を設けて実施したが、本稿では学生が実感している学習成果について報告する。

Ⅱ 研究目的および意義

実習前OSCEを体験することにより、学生自身がどのような学習成果を実感しているのかを明らかにすることを目的とする。これにより、学習成果の向上を目指した実習前OSCEにおける課題作成やSPの活用、フィードバックの仕方などの方法的なことや教育的意味を検討する際の基礎資料となり、看護教育におけるOSCEの発展にむけて寄与できると考える。

Ⅲ 本学における実習前OSCEの概要

1. 実習前OSCEの目的および実施

本学のOSCEは、①看護技術力（看護の基本技術を実践に実施する力）、②看護判断力（対象者のニーズの充足に向けて対象とそのケアに関わる人々と問題解決を図っていく力）、③コミュニケーション力（相手の思い・考えを十分に受け止め、尊重しその明確化を支える力）、④ヒューマンケアリングな

関係形成力（対象者とともに、倫理的判断に基づく援助的な人間関係を形成する力）、⑤チーム構築力（治療とケアに関する対象者のニーズを充足するためのチームアプローチに関する能力で、専門職としての自覚と責任のもと、看護職同士の協働だけでなく他職種と連携することを含む）の5つの看護実践能力を育成することを目的として卒業前および実習前に導入している。実習前OSCEについては、母性看護学、小児看護学、成人看護学、老人看護学、精神看護学、地域看護学の6領域の実習前に実施している。実際には、3年次9月～12月に3クール、4年次5月～7月に3クール実施することになる。このように実習の前にOSCEを実施することで、学生に5つの看護実践能力における課題の明確化を図り、臨地実習に向けての学習の動機づけを行うと同時に、教員が個々の学生の看護実践能力を確認している。

実施日に関しては、実習開始の前週、または実習開始初日等、各領域の状況に応じて行っている。

2. 用語の説明

1) OSCE班

本学の各領域の教員1名ないし2名で構成されており、OSCEの課題、シナリオ、評価表に関して、各領域との調整を図りながらの作成およびOSCEの運営全般の中心的役割を担う。

2) SP班

本学の各領域の教員1名～2名で構成されており、地域住民へのSP募集の広報活動、SP養成のための研修会およびフォローアップ研修の企画・運営を行う。

3) レクネス（RCNES）

Red Cross Nursing Education Supporterのことで、看護基礎教育と臨床の架け橋となり赤十字看護

表1 平成22年度 OSCE年間スケジュール

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年生							演習へのOSCE導入、トレーニング					基礎Ⅰ
2年生	演習へのOSCE導入、トレーニング				基礎Ⅱ	基礎Ⅱ				成人Ⅰ	成人Ⅰ	
3年生	演習へのOSCE導入、トレーニング						領域	領域	領域			
4年生		領域	領域	領域		総合						
助産												

OSCEトレーニング
 実習前OSCE
 領域実習
 卒業前OSCE

教育のサポートをする。参加資格を有するのは、赤十字施設、本学卒業生を主体とした実習施設の臨床実習指導者、および大学院生である。

3. 実習前OSCE実施までの準備

1) 課題作成

各々の領域の特性に合わせて、実習での看護実践に活用でき、かつ5つの看護実践能力を盛り込んだOSCE課題を作成し（表2参照）、到達目標および行動目標を設定する。同時に、状況設定や患者設定も行いシナリオを作成する。さらに、必要物品、OSCE実施配置図、評価表、評価マニュアルを作成する。

課題作成は各領域に任されるが、OSCE班で課題内容の妥当性および時間内での実施可能性等について検討する。

2) 学生への説明

領域実習開始前の全体オリエンテーションで、学生用OSCEガイドを用いて、OSCEとは何か、OSCEの目的と意義、年間スケジュール、OSCEの実際を説明する。さらに、領域別のOSCE課題の提示を行い、シミュレーションセンターやICTを活用した自己学習を促す。

その後、各領域で実習前OSCEの実施前に再度オリエンテーションを実施する。

3) 評価者

本学では、レクネス等を活用し、臨床実習指導者を評価者に加えて、教員と2名で評価にあたる。そのため、臨床実習指導者と教員がOSCE実施前に評

価表をもとに評価基準のすりあわせを行う。

4) SP

SPを活用する場合は、SP班に依頼し、SP養成講座の中級を終了したボランティアの方の紹介を得る。その後、ボランティアの方がシナリオに沿ってSPとして演じられるように活用する領域が指導を行う。また、領域によっては教員がSPを担当する場合もある。

4. 実習前OSCEの実際

当日、オリエンテーション後に、領域によって2～6ステーションに分かれて、実習前OSCEを実施する。

以下に1回のOSCEの流れを述べる。まず、学生は課題読みを1分で行う。次にOSCE課題を10分で実施する。その後、フィードバックとして、学生がOSCEを実施して感じたこと、次にSP（SPを活用していない場合は除く）、臨床実習指導者と教員が各々1分以内で行う。これら一連の流れの所要時間は15分程度としている。

また、フィードバック時には、初めに肯定的なフィードバックを行い、その後に改善点や指導を要することを伝えるようにする。

評価表については、OSCE実施後に臨床実習指導者および教員の評価を各々レーダーチャートにして、5つの看護実践能力の獲得状況が一目で分かるようにして学生に返却している。

表2 領域別OSCE課題および到達目標

領域	OSCE課題	到達目標
母性看護学	新生児の抱き方・寝かせ方・体重測定	新生児の抱き方・寝かせ方と体重測定を安全・安楽に実施し、結果をアセスメントして新生児の体重の生理的变化について母親へ説明することができる。
小児看護学	子どもの状態に応じた呼吸測定と肺音聴取	子どもの状態を観察し、安全に呼吸測定が実施できる。
成人看護学Ⅱ	輸液ポンプを活用する意識障害のある対象者への看護	意識障害がある対象者の状況を思いやり、対象者に配慮した説明を行い、指示された速度で輸液を確実に実施できるよう、輸液ポンプを安全に用いることができる。
老人看護学	片麻痺のある高齢者の自立支援・安全に配慮した車椅子移乗の介助	左麻痺のある高齢者の状態を確認し、自立支援をふまえて、安全に車椅子移乗の介助ができる。
精神看護学	薬物療法における患者の副作用の観察およびアセスメント	患者の状態から悪性症候群の疑いがあることを推察でき、アセスメントに必要な項目についての観察や訴えを聞いて苦痛の緩和を図り、看護師に報告することができる。
地域看護学	脳卒中後遺症を持つ対象者への服薬管理	在宅で生活する脳卒中後遺症のある療養者とその家族の健康状態を観察し、服薬の確認及び自己管理に必要な服薬指導が適切に実施できる。

Ⅳ 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、実習前のOSCEを体験することにより、看護学生がどのような学習成果を実感しているのかを明らかにするため、質的記述的研究とした。

2. 研究対象

平成22年9月から12月にかけて、3領域の実習前にOSCEを受けた本学の3年生127名を対象とした。

なお、平成22年度にOSCEの導入を行ったため、本学3年生の実習前OSCEが開始となる。

3. データ収集方法

領域別の実習前OSCEのオリエンテーション時にアンケート用紙を配布し研究に関する説明を行った。特に、任意での参加の保証、成績には無関係であること、匿名性とプライバシーの遵守については十分な説明と配慮を行った。そして、OSCE実施後にアンケート用紙に無記名で記載して回収箱への投函を依頼し、回答をもって本研究に同意を得たものとした。なお、教員の存在が強制力を持たないように、回収箱は教員がいない場所に設置した。

このようにして実施したアンケートの質問項目、「実習前OSCEを受けることによって、あなた自身にどのような成果をもたらすと思われましたか」の自由記載の内容を記述データとした。

4. 分析方法

記述データを分析するため、ベレルソンの内容分析に依拠した。具体的な手順は以下の通りである。

1) アンケート用紙の質問項目「実習前OSCEを受けることによって、あなた自身にどのような成果をもたらすと思われましたか」の自由記載から、学生が感じている成果に着目して内容を抽出し、記録単位・文脈単位に分割してコード化した。

2) コード化したものの抽象化を確認しながら内容

コード一覧表を作成した。

3) 内容コードの意味内容を検討し、類似性を検討しながら、サブカテゴリー、カテゴリーを形成した。また、1) 2) 3)のプロセスにおいて、できる限り客観性が保たれるように教員数名で検討しながら行った。

4) 結果の信頼性の確認をスコットの式に基づいて、1)～3)のプロセスに関与していない大学の看護教員2名によって行った。

5. 倫理的配慮

日本赤十字広島看護大学の倫理審査委員会の承認（承認番号：1007）を得て本研究を実施した。特に学生には任意の参加を保証した上で、①調査の趣旨、②匿名性とプライバシーの遵守、③成績には無関係であること、④データの管理および結果の発表について、口頭と書面で説明を行った。研究参加への同意については、アンケート用紙の回答をもって同意を得られたものとした。

Ⅴ 結 果

アンケートの回収率は72.8%で、その中で得られた記述データを分析した結果、137記録単位を抽出し、4つのカテゴリーに分類され、11のサブカテゴリーが含まれた。以下に、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは〈〉、内容は「」で示す。

カテゴリーは記録単位の多い順に【看護技術の修練への見通し】【臨場感のある看護実践への手ごたえ】【看護師としての自己理解の深まり】【看護実践への自己肯定感の向上】である。（表3参照）

また、スコットの式に基づいた大学の看護教員2名によるカテゴリー分類の一致率は85.2%、88.9%で信頼性の確保を示した。

次に、記録単位数の多かった順に、各カテゴリー、

表3 カテゴリー一覧

カテゴリー	サブカテゴリー	記録単位(%)
看護技術の修練への見通し 53 (38.7%)	不十分な看護技術の自覚	28 (20.4%)
	自己の課題の明確化	25 (18.3%)
臨場感のある看護実践への手ごたえ 39 (28.5%)	臨床での実践に生かせるポイントの理解	20 (14.4%)
	SPへの実践から得られる学び	15 (10.9%)
	授業で得た知識の活用	3 (2.2%)
	看護師としての自覚の深まり	1 (0.7%)
看護師としての自己理解の深まり 25 (18.2%)	他者からの指摘による自己への気づき	16 (11.6%)
	ありのままの自分との直面	9 (6.6%)
看護実践への自己肯定感の向上 20 (14.6%)	自己の可能性の実感	9 (6.6%)
	精神的成長の察知	8 (5.8%)
	他者評価から得られる自信	3 (2.2%)

(n = 137)

サブカテゴリーについて述べる。

【看護技術の修練への見通し】

学生が実習前にOSCEを体験することによって、自分自身の知識・技術が確認でき、課題が明確化して、今後の看護技術の修練にむけて何をすればいいのかの見通しがついた感覚として分類された。このカテゴリーは、〈不十分な看護技術の自覚〉〈自己の課題の明確化〉の2つのサブカテゴリーを含み、分類された記録単位数は53で、全記録単位数の38.7%を占め、最も多い。

〈不十分な看護技術の自覚〉は、実習前OSCEで臨床に近い状況やS Pに対して看護技術を実施する体験により、学生が自分の看護技術の習得の不十分さを自覚することとして分類された。代表的な内容としては、「練習ではできていてもS Pでは時間がかかってしまった」、「実際にやってみることで、自分の不足しているところが分かった」などである。

〈自己の課題の明確化〉は、実習前OSCEにおける看護実践の体験および評価者やS Pからのフィードバックにより学生が自己の課題を明確化できることとして分類された。代表的な内容としては、「実際にS Pに対して看護を行うことで、今まで気づかなかった自分の課題が分かった」、「評価者からのフィードバックによって具体的な課題が分かった」などである。

【臨場感のある看護実践への手ごたえ】

臨床現場で行われている原理・原則を踏まえながらも対象に応じて行う看護実践について、学生が自ら体験することによる気づきや、S Pおよび臨床実習指導者や教員からのアドバイスによる看護実践の具体的な学びを得て、臨床での実践に手ごたえを感じていることとして分類された。このカテゴリーは4つのサブカテゴリー、〈臨床での実践に生かせるポイントの理解〉〈S Pへの実践から得られる学び〉〈授業で得た知識の活用〉〈看護師としての自覚の深まり〉を含み、分類された記録単位数は39で、全体の記録単位数の28.5%を占めている。

〈臨床での実践に生かせるポイントの理解〉は、臨場感のある看護実践を体験し、臨床実習指導者や教員およびS Pからのフィードバックにより、臨床での看護実践に役に立つポイントを理解できることとして分類された。代表的な内容としては、「プロの方のご指導やアドバイスは普段はしてもらえないので、教科書にはない具体的なことを知れて大きな学びになった」、「実際にはこうしたらいいというのがわかり活用していこうと思った」などである。

〈S Pへの実践から得られる学び〉は、実際にS P

に看護実践を行い、対象との相互作用の中で得られる学びとして分類された。代表的な内容としては、「手技に緊張しすぎて、声かけが出来ていないのが分かった」、「看護技術だけではなく、コミュニケーション能力も大切であることが分かった」、「患者さんが理解できる言葉づかいができるようになりたい」などである。

〈授業で得た知識の活用〉は、授業で知識としては理解していたが、実際にどのように活用すればいいのかを理解できることとして分類された。代表的な内容としては、「授業で学んだことを具体的にどうすればいいのかが理解できたので実践で活用したい」などである。

〈看護師としての自覚の深まり〉は、臨場感やS Pとの関わりを体験することにより学生の中に看護師としての自覚が深まることとして分類された。代表的な内容としては、「患者さんとの接し方に看護師として関わるという意識が強くなった」である。

【看護師としての自己理解の深まり】

臨床実習指導者や教員、S Pからのフィードバックにより他者を通して、自分では気づけなかった看護師としての自己の内面の傾向性を知ることや自分の中のよい部分とそうでない部分を知ることという自己の客観視と自己受容につながることで分類された。このカテゴリーは、〈他者からの指摘による自己への気づき〉〈ありのままの自分との直面〉の2つのサブカテゴリーを含み、分類された記録単位数は25で、全体の記録単位数の18.2%である。

〈他者からの指摘による自己への気づき〉は、実習前OSCEでのS Pおよび臨床実習指導者や教員からのフィードバックにより、今まで自分が知らなかった自分に気づくこととして分類された。代表的な内容としては、「自分が気づいていない部分を教えてもらい、改めて自分を知ることができた」、「自分では無意識にしていた行動を指摘してもらうことで、意識して行動しようと思った」などである。

〈ありのままの自分との直面〉は、実習前OSCEを受けたことで、S Pおよび臨床実習指導者や教員による他者評価や自分自身の気づきから自分の現状を知り、受け入れることとして分類された。代表的な内容としては、「自分のよいところや悪いところを知ることができた」、「精神的な余裕がないと簡単な間違いをする傾向があることが分かった」などである。

【看護実践への自己肯定感の向上】

実習前OSCEを受けることによって、看護実践を行うことに達成感や自己の可能性を実感できるこ

と、ストレスに打ち勝つことができたという精神的成長を感じられること、それらが自信につながることで自己肯定感が向上することとして分類された。このカテゴリーは、〈自己の可能性の実感〉〈精神的成長の察知〉〈他者評価から得られる自信〉の3つのサブカテゴリーを含み、20の記録単位が分類され、全記録単位に占める割合は14.6%である。

〈自己の可能性の実感〉は、実習前OSCEを受けるために練習を重ね、それが自分自身の看護実践の向上につながったことで、自己の可能性を実感できることとして分類された。代表的な内容としては、「また1つできることが増えたことを実感できた」、「練習する中で、ここはどうしていくとよいかを含めて考えを深められた」などである。

〈精神的成長の察知〉は、実習前OSCEを受けている時に学生自身が心の持ちように精神的成長を感じとれることとして分類された。代表的な内容としては「予想外のことに落ち着いて対応することができるようになり、成長できたのかなと思った」、「緊張に打ち勝つことができたので精神的に強くなれたのかなと感じた」などである。

〈他者評価から得られる自信〉は、実習前OSCEを受けて、S Pや臨床実習指導者、教員からの他者評価によって自信が得られることとして分類された。代表的な内容としては、「褒めていただき、その部分は大切にしていこうと思った」、「間違っていないという自信をもつきっかけになった」などである。

Ⅵ 考 察

【看護技術の修練への見通し】は、〈不十分な看護技術の自覚〉〈自己の課題の明確化〉であるため、できていない自分に直面化することでもあり、自己否定的になる可能性もある。しかし、学生は肯定的に受け止めている。これは、自己の課題を知ることによって実習前にやるべきことが明確となり、課題に取り組むことで臨床での看護実践への不安の軽減につながることによると推察できる。つまり、学生は「できない」というより「できるようになる」ための一段階と受け止めているのではないだろうか。

また、臨場感がある中での看護技術の提供やS Pとの間で生じる相互作用を通して、認識領域（知識）のみならず、精神運動領域（技術）と情意領域（態度・感情）を統合した看護実践が意識づけられることで、より実践的な看護を学ぶ機会になっていると考えられる。この体験は『看護師として』という意識を学生に根づかせる契機になり、看護師としての自己形成につながっていくと考える。

さらに、実習前OSCEを体験することでS Pや臨床実習指導者、教員という他者からの評価基準を取り込み、自己の現実像との照らし合わせを繰り返しながら看護技術の修練を図る、このプロセスに意味があると考ええる。つまり、どのような看護実践を行えばいいのかという価値基準を内面化し、看護師としての理想自己が形成されていき（速水、1998, p.153）、理想自己になりたいという思いは、自分で行動し持続していくという自律的動機づけに繋がると考える。したがって、実習前OSCEを領域毎に繰り返し体験するプロセスは、学生が自律的動機づけにより看護師としての自己形成を助長していると考えられる。

そして、【臨場感ある看護実践への手ごたえ】は、看護原理・原則を踏まえて、対象の反応を見ながら行う看護実践は応用編であるため、学生は基礎編から応用編にステップアップし看護師に近づいている感覚がもてると推察できる。加えて、サブカテゴリーの具体的内容にみられる、「～したい」という達成動機は自己成長力を支える意欲に関わっていると言える（梶田、1988, p.156）。この自己成長力は自己形成ないし自己実現に関する態度や意欲のことである（梶田、1988, p.154）。つまり、学生は「看護師になる」という感覚に「なりたい」という達成動機が生じる事によって看護師としての自己形成が促進されていくと考える。

加えて、これら2つのカテゴリー、【看護ケアの修練への見通し】【臨場感ある看護実践への手ごたえ】に共通していることは、より良い看護実践にむけて、学ぶことを学生が自己決定していることである。この自己決定は、自ら学ぶことを選択し行動すると言う点で自律的動機づけと関連すると考える。以上のことから、学生は看護師としての自己形成に向けて自律的動機づけを持って踏み出せているといえる。このことを学生は学習成果として実感していると考えられる。

看護師としての自己形成の側面以外にも、【看護師としての自己理解の深まり】における、〈他者からの指摘による自己への気づき〉は自己統一感、〈ありのままの自分との直面〉は自己受容と自己の内面の成熟に向けた変化を示しているといえる。かつ、【看護実践への自己肯定感の向上】に見られる達成感や承認欲求の充足によって得られた自信は自己効力感を高めると考えられ、いずれも内面の成熟に向けた変化を助長すると考える。さらに、【看護実践への自己肯定感の向上】において教員や臨床実習指導者という学生が認められたいと思う対象から

承認を得ることは、自らの向上意欲を湧きたたせ実行に移していく自律的動機づけに繋がると考える。

つまり、【看護師としての自己理解の深まり】【看護実践への自己肯定感の向上】の2つのカテゴリからは、自己の内面の成熟に向けた変化および自律的動機づけを学生が学習成果として実感していると考えられる。

以上をまとめると、学生は実習前OSCEによる学習成果として【看護技術の修練への見通し】【臨場感ある看護実践への手ごたえ】【看護師としての自己理解の深まり】【看護実践への自己肯定感の向上】を実感しているが、これらに含まれている意義は、1つは看護師としての自己形成に向けて踏み出していること、2つには自律的動機づけが生じたこと、3つには自己の内面の成熟に向けた変化であると考ええる。

したがって、実習前OSCEは臨床能力を評価することにとどまらず、学生の看護師としての自己形成、自律的動機づけ、自己の内面の成熟にも関与しているといえる。

これらを踏まえ、実習前OSCEの向上を図るには、実習前OSCEを受けるまでの自己学習のプロセスを含めた看護師としての自己形成の助長、および自律的動機づけや学生の内面の成熟に向けた変化の助長を包含した視点からも実習前OSCEの評価および検討を行い内容に反映させていくが必要になると考える。

VII 研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、研究対象の限定性に加えて、学生により実習前OSCEを受けた領域の異なりがあることである。

今後の課題としては、以下の3点が挙げられる。

- ① 4年生前期にも調査を継続し、学生が全領域の実習前OSCEを体験してのデータを収集すること。
- ② 学生が実感する学習効果を量的に測定するためのアンケートの質問項目の精選を行うために、記述データだけではなくインタビューによる質的研究を実施すること。
- ③ 学生が実感している学習成果について経時的、または領域別に調査を行うことで、具体的な示唆を得ること。

VIII 結 論

本学における領域別の実習前OSCEを体験することにより、学生が実感している学習成果の内容を明らかにするために、3年生を対象に自記式アンケー

ト調査を行い、以下の知見を得た。

1. 学生が実感している学習成果の内容として、【看護技術の修練への見通し】【臨場感ある看護実践への手ごたえ】【看護師としての自己理解の深まり】【看護実践への自己肯定感の向上】の4つのカテゴリに分類され、11のサブカテゴリが含まれた。
2. 分類された4つのカテゴリに含まれている意義は、①看護師としての自己形成の助長、②自律的動機づけ、③自己の内面の成熟に向けた変化であることが示唆された。
3. 今後、実習前OSCEの向上を図るために、学生が実習前OSCEを受けるまでの自己学習のプロセスも含めた自己形成の助長、および自律的動機づけや学生の内面の成熟に向けた変化の助長を包含した視点からの実習前OSCEの評価および検討を行い内容に反映させていくが必要になると考える。

謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力をいただきました本学3年生の学生および教員の皆様、そしてレクネスやSPのボランティアの方々、臨床実習指導者の方々に深く感謝いたします。

なお、本論文は第37回日本看護研究学会学術集会で発表したものに一部修正、加筆したものである。

文 献

- 浅川和美, 市村久美子, 小室佳文, 堀内ふき (2006). 実習前OSCEが臨地実習に及ぼす影響 実習中期の学生アンケート調査から. 日本看護研究学会雑誌, 29 (3), 240.
- 浅川和美, 市村久美子, 小室佳文, 富田美加, 金子昌子, 梶原祥子, 池田智子, 島田智織, 丹下幸子, 糸嶺一郎, 黒木淳子, 加納尚美, 田村麻里子, 間野聡子, 角 智美, 前田和子 (2005). 領域別実習の中間期におけるOSCEによる形成的評価の有効性 OSCE実施後の学生アンケート調査から. 日本看護研究学会雑誌, 28 (3), 179.
- 速水敏彦 (1998). 自己形成の心理. 東京, 金子書房.
- 梶田叡一 (1988). 自己意識の心理学. 東京, 東京大学出版会.
- 二村良子, 氷見桂子, 大平肇子, 今田葉子, 崎山貴代, 村本淳子 (2005). 臨地実習 (母性看護学) 前OSCEにおける課題の検討. 日本看護研究学会雑誌, 28 (3), 163.

大場良子，鈴木玲子（2008）．成人看護学実習前の看護OSCE導入の試み（第2報）形成的評価を通しての学生の学び．日本看護科学学会学術集会講演集，28回，331．

大野殖子（1987）．看護教育の視座 手づくりの教育をめざして．東京，ゆみる出版．

清水裕子，内藤明子，小坂裕佳子，勝野とわ子（2008）．高齢者看護学における実習前看護実践能力試験の效果に影響する要因．日本看護学教育学会誌，18巻学術集会講演集，169．

白水栄子，堀内園子，横井郁子，勝野とわ子（2006）．

高齢者看護学領域における実習前OSCEの活用（第2報）．日本看護学教育学会誌，16巻学術集会講演集，183．

高橋由紀，浅川和美，沼口知恵子，黒田暢子，伊藤香世子，近藤智恵，市村久美（2009）．全領域の教員参加によるOSCE実施の評価－看護系大学生の認識から見たOSCEの意義－．茨城県立医療大学紀要，14，1－14．

内田倫子，土屋八千代，山田美幸，緒方昭子（2008）．老年看護学臨地実習におけるOSCEの試み．日本看護研究学会雑誌，31（3），292．

A study of learning outcomes that nursing students realized through an objective structured clinical examination (OSCE) before the start of the clinical internship

**Misa SASAMOTO Yumie KOZONO Yukari OKUMURA Mie YAMAMURA
Misa KAWANISHI Rieko NAKANOBU Naoko MASAKI Yuka MURATA**

Abstract:

The purpose of this investigation is to examine the learning outcomes that nursing students experienced through an objective structured clinical examinations (OSCE) before the start of their clinical internship for each course. The study conducted the survey for the third year students of the Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing and carried out content analysis. It found the four major contents including eleven subcategories of the learning effects that they realized: outlook for the training of nursing care; reaction of future nursing practice; deepening their self-understanding as a nurse; improving their self-esteem for nursing practice. This result implies that students recognized the leaning effects of OSCE are a) to promote self-formation as a nurse, b) to encourage self-motivation, and c) to change towards maturity of their characters. In conclusion, the paper suggests the necessity to examine the process before taking the OSCE for promoting self-formation as a nurse and to choose the best timing to implement the OSCE and to consider the contents for encouraging self-motivation and changing towards maturity of students.

Keywords:

objective structured clinical examination (OSCE), learning outcomes, content analysis